HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カール・バルトのフォイエルバッハ論
Author(s)	滝沢, 武人
Citation	基督教学, 13, 76-86
Issue Date	1978-09-14
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46343
Type	article
File Information	13_76-86.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カール・バルトのフォイエルバッハ論

滝澤武人

一

フォイエルバッハがヘーゲル左派に属しており、ヘーゲルからマルクス、エンゲルスにいたるまでのいわゆる〈中間項〉となっていることは一般に認められよう。しかしながら、大井正が指摘するように、フォイエルバッハのその〈中間項〉的意義は適確に把握され十分に評価されてはおらず、むしろマルクス主義者の著作においても、その〈中間項〉的地位を無視したり軽視したりしているものが意外に多いのである。[1] そのような事態は、梅本克己が強調する如く、「フォイエルバッハを自然主義、人間主義の立場におしとどめ、唯物論者たらしめまいとしている」[2] 一般の観念論者のフォイエルバッハ解釈の傾向と密接な関連を有するものであろう。更に、そのようなフォイエルバッハ解釈と根本的には結合するものとして、プロテスタント神学者や宗教哲学者によるフォイエルバッハ解釈（反論と対決）の試みが存在していると思われる。その結果として、フォイエルバッハは「観念論者によってもっとも優遇される唯物論者」[3] とされその哲学は、あるいは生の哲学、あるいは観念論的人間学、あるいは実存主義、又あるいは一つの新らしい（しかし基本的には不十分で否定さるべき）キリスト教神学や宗教論としてさまざまに解釈されてきた。しかしながら、それらはどのような立場からの解釈であれ、フォイエルバッハ哲学を何らかの形でねじまげており、それをあるがままにとらえているとは思われない。船山信一によれば、「当時はもちろんのこと、今日に至るまで、キリスト

教界は彼の批判に対して充分に答えていない」し、他方マルクス、エンゲルスを初めその後のマルクス主義者たちでさえも「彼の批判を充分に汲み取っているとはいえない」のであり、[4]「マルクス主義者たち」は、「フォイエルバッハ全体、したがってまたその宗教論をも安易に「片づけ」てしまった」だけなのである。[5] 私は、船山のこの指摘を正当かつ極めて重要なものと考える。フォイエルバッハのキリスト教批判・宗教批判を、特にキリスト教学・宗教学という分野において検討し直し、受けとめ直すという作業は一つの重要な課題となるであろう。その本来的作業は他日の稿を待たねばならないが、おおよそ以上のようなフォイエルバッハに対する視点に基づきつつ、その視点をより明確なものとするために、本小稿においてはカール・バルトのフォイエルバッハ論に多少の検討を加えようと考える。ここで特にバルトによるフォイエルバッハ論を取りあげるのは、さしあたっては、バルトがわれわれの世紀を代表する神学者たちの一人であるというにすぎない。

バルトのフォイエルバッハ論は、一九二六年夏学期のミュンスター大学における講義『シュライエルマッハー以後のプロテスタント神学史』がもとになっている。それは、先ず一九二七年の『時の間』(*Zwischen den Zeiten*) 誌上に発表され、[6] 後にその講義全体に「前史」を付して出版された著書『十九世紀のプロテスタント神学』の中にフォイエルバッハに関する一章が含まれている。[7] 後者の分量は前者の約五分の一に短縮されており、内容的にも新しい叙述はほとんど認められない。従って以下においては、前者のみを考察の対象としたい。

ここで、フォイエルバッハについて論じた時期のバルトをあらかじめ一瞥しておこう。この時期は、極めて重要な二つの著作『ロマ書』(一九一九年) から『知解を求める信仰』(一九三一年) へのいわば〈過渡期〉の段階にあり、「弁証法的思考から教義学的思考へ」[8] の移行期として、全歴史にわたる教義の研究および特に十九世紀の神学的ならびに哲学的思惟との激しい苦闘とによって、一九三〇年頃に現われたバルトの思考における「真に決定的な移行」[9] をめざすものであったとえよう。そしてフォイエルバッハとの関連でつけ加えるならば、〈宗教社会主義運動〉との断

絶と〈神の言葉の神学〉の樹立の時であった。バルトはこのような時期にフォイエルバッハを取りあげたのである。

二

確かにフォイエルバッハは、哲学年鑑に「観念論者」としてではなく、むしろ「感覚論者、実証主義者、或いはさらに唯物論者というような、神学からは一番遠く離れた片隅」に記されている哲学者であり、又その生涯にわたってたぐいまれな熱情をもって「反神学」(Anti-Theologie)を事とした哲学者である。[10] そのような哲学者が神学の歴史にどのような関係を有しており、バルトがそのような哲学者をどのように評価するのか、ということはなはだ興味深いことである。その際先ず確認すべきことは、バルトもフォイエルバッハもともに、もちろん全く異なる見地からではあるが、十九世紀のプロテスタント神学に対して激しい批判(否定)をなしているということであろう。[11] そのためバルトのフォイエルバッハ論は、一般の純護教的神学者たちのように、「無制限に皮相」で、「ばかげた陰険な諸判断」[12]ではなく、フォイエルバッハの業績の積極的な意味を一応は正しく評価しているのである。

先ずバルトは、フォイエルバッハが近代プロテスタント神学の仲間に「内面的にも実質的にもたぐいまれな正当性をもって」属すべき人であり、更に彼の反神学が「近代神学の問題設定の内部におけるあるきわめて重要な可能性を意味する」ことを強調する。[13] ここでバルトは、「哲学者」であるフォイエルバッハを「神学」者に、その「反神学」の「哲学」を「神学」たらしめんとして、フォイエルバッハの教説をかなり詳細に要約・紹介して行く。[14] その際、バルトが取りあげるフォイエルバッハの著作は、『キリスト教の本質』(一八四一年)、『将来の哲学の根本命題』(一八四三年)、そして『宗教の本質にかんする講演』(一八五一年)の三つである。そのバルトの要約を再要約する紙幅はないが、フォイエルバッハの教説を神学者仲間に対して諄諄と語り聞かせるが如くである。即ちフォイエルバッハは、「単なる懐疑家でも否定者でもない」のであり、むしろ感激と情熱をもって「然り!」(Ja!)と言っているのであり、

更にその「神学の人間学への転化」という彼の根本的意図は、「どの神学者の意図とくらべても積極的」なのである。[15] フォイエルバッハは、その教説によって人々を「虚偽から真理へと立ち返るように召喚」(aufrufen)しようとしており、[16] 一定の「救済論」(Heilslehre)を提供しているのであり、更に神学の重要性をも認めようとしているのである。[17] これらには、フォイエルバッハを何とか神学的にとらえようとするバルトの余りにも神学的な視点が存在している。しかしながら、フォイエルバッハにはそのような神学的な意味での「然り!」も「召喚」も「救済論」も存在してはいないのである。フォイエルバッハはもっぱら「人間の現実的本質を肯定するために、神学および宗教の空想的な仮象的本質(幻影)を否認する」[18]のである。神(神学)を否認し、あるがままの自然(自然学)と人間(人間学)を肯定し、そこから出発するのであり、それ以外ではない。[19] この見解こそまさに「唯物論」であって、それ以外の何物でもない。ましてや「救済論」や「神学」と呼びうる可能性は全く存しない。そしてそれは、又「無神論」でもあって、それ以外の何物でもない。フォイエルバッハ自身明言しているように、「私の教説の一つの帰結は、いかなる神も存在しないこと」即ち、「自然および人間から区別された抽象的非感性的な存在者であって、世界および人類の運命にかんして気ままに決定を下すようなものは何も存在しない」ということなのである。[20] 次に、そのようなフォイエルバッハをバルトがどのように近代神学の歴史の中に位置づけようとしているかを見て行こうと思う。

三

バルトは、フォイエルバッハがキリスト教に対して語る言葉というものが「ほとんど悪臭をはなつほどに卑俗なこと」であるにしても、それが「フォイエルバッハを取り囲んでいた神学」に対する正当な「一つの問い」(eine Frage)であることを指摘する。[21] 即ちバルトによれば、シュライエルマッハー、および彼以後の神学に共通の方法的出発点は、「宗教・啓示・神関係というものは人間の一つの述語として理解されうるものなのか、またそれはどの程度可能なの

か」という問題設定であり、その行きつくところは、「人間性の興隆」を通しての「人間の神化」(die Apotheose des Menschen) 以外の何ものでもありえない、ということである。[22] もちろん、シュライエルマッハー以後の神学の営みのすべてが、フォイエルバッハ流のいわば「卑俗な意図」を持っていたわけではないが、結果的にはフォイエルバッハのその問いが、「それらすべての線が不可抗的にぴったりと出会うと思われる交点」となっているのであり、フォイエルバッハ自身は、これらの司祭仲間全体が無意識的に共有していたいわば「秘伝的奥義」を広く世間にあばきだした「炯眼な探偵」(ein Spion) のようなものなのである。[23] 即ち、神学はずっと以前からすでに人間学になってしまっていたのか？ そして近代の神学者は真に自覚的に人間の神化を企てているのか？ フォイエルバッハのこの真剣な問いは、フォイエルバッハと同時代の人々のみではなく、バルトによれば、彼以後のシュヴァイツァーやローテやホフマンのような人々、又更に、リッチュルやハルナックに至るまでもつづいているのである。[24] それ故に、バルトはそのフォイエルバッハの問いを、彼自身とその時代の可能性への問いとして問わざるをえないのである。確かにフォイエルバッハの問いは、その世紀の神学によっては十分に聞かれも理解されもせず、[25] バルトによって初めて、つまりバルトがその世紀の神学を批判の対象とする作業において初めて本来の問いとして明確に認識されるようになったと言いうるであろう。この点におけるバルトのフォイエルバッハ理解は鋭く、正当なものであると言えよう。そして更にバルトは、フォイエルバッハのその問いを「重要で切迫したもの」にしている理由として次の三つを指摘している。

一、その問いは、単にシュライエルマッハーに代表される「近代神学」だけにかかわるものではなく、フォイエルバッハが特に好んで引き合いに出すルター自身にかかわる問いであること。バルトは、ルターの特に信仰論と受肉論を検討しつつ、フォイエルバッハへといたる路を開いた萌芽は実はルターの教説の中にあったとし、それがやがてルター派正統主義の教義の中に固定化されていったのであり、「ドイツ福音主義神学」が生まれたのは、「良き星のもとにではなかった」と主張する。[26]

二、フォイエルバッハの断固たる「反唯心論」(Anti-Spiritualismus)、積極的に言えば「人間学的現実主義」(der anthropologische Realismus) に基づくキリスト教教義学の解明。それは古いキリスト教の伝統と結びついているのであり、唯心論的に人間の精神や心や良心や内面性だけを問題にする人は、真に神を問題にしているのではなく、まさに「人間の神化」をめざしているのではないか、とバルトは問う。[27]

三、フォイエルバッハの学説が社会主義的労働運動のイデオロギーと「親縁関係」を持っていること。バルトによれば、フォイエルバッハによる宗教の人間学化は、解放の一部であり、解放戦の一部であった。そして、その当時のキリスト教会(および一般市民階級)は、その戦いの正当性と必然性とを全く何も知らず、むしろ、「緩慢で無知で悪意にみちた抵抗」という役割を演じていたのである。[28]

これらのうち、一と二は事実としては正しい指摘であろう。だが二のフォイエルバッハの「現実主義」が、キリスト教の伝統と結びつくものとは思われない。

四

以上、バルトのフォイエルバッハ論を簡単に紹介してきたのであるが、確かにバルトは、近代神学の歴史の中でのフォイエルバッハ出現の必然性をあざやかに示し、その業績の積極的な意味を正しく評価しているとは言えよう。[29] しかしながら、その作業は同時にフォイエルバッハを近代神学の歴史という枠の中に閉込めようとする試みであると思われる。それは、バルトがフォイエルバッハを「近代神学という肉体の中の一つの刺」(ein Pfahl im Fleisch)[30] という言葉において表現するときに典型的に明らかになっていると思われる。もちろんこの用語はパウロのものであるが、そうするとその「刺」は、「高慢にならないように、わたしを打つサタンの使」[31]にすぎないのである。それは、単にその「肉体」をよりよく生かすために「与えられた」ものであり、単に「痛み」が残るだけなのであろう。しかしながら、

フォイエルバッハの哲学は、まさに神学という「肉体」をいわば討果す「剣」なのではないか。バルトは、フォイエルバッハを「刺」として「肉体」の中に抱込むことによって、フォイエルバッハという「肉体」を骨抜きにしているが如くである。バルトがフォイエルバッハを、神学的・聖書的な用語によって、バルト的な視点からバルト的な世界へと位置づけようとしている箇所は他にも散見されるのである。[32] バルトのフォイエルバッハ論は、反神学・反キリスト教・反観念論という明確なフォイエルバッハの立場を再びキリスト教とその神学の中に位置づけようとするきわめて意識的な護教論である。そして、最初には「いっさいの神学に対する反対」を事とした「哲学者」と認めながら、いつの間にやら「神学者」に仕立あげ、最後にはその「神学」に対する「批判」をなして、フォイエルバッハ論を終るのである。[33] バルトいわく、「もちろん彼の学説は、たぐいまれなほど浅薄なもの」(eine Plattheit) である。[34] その「浅薄さ」は、フォイエルバッハの「人間は一切の事物の規準であるだけではなく、一切の価値の総体であり根源であり目標である」という見解が、又「人間的実存とその要求・願望・理想の正当性と確実性」についての見解が、何の理由づけもなしに確立されていることから生まれてくるのであり、更にその「浅薄な」宗教解釈に打ち勝つには、何と「彼を単純に面と向かって笑うこと」が必要だというのである。[35] まさにこのような「批判」には反論する必要もない、としか言いようがない。次にバルトによれば、フォイエルバッハは「悪と死」を知らない者、従って「人間の本質」をも知らない者であり、そのような人間観から「神の本質は人間の本質である」という「あらゆる幻想中最も幻想的な幻想」、又「恥知らずの（神と人間とを）同一視する神学」(die unverschämte Identitätstheologie) をつくるのである。[36] これも又、神学者バルトによる全く的外れな「批判」と言えよう。例えば「死」の問題については、船山信一が強調するように、実はフォイエルバッハが、「生涯を通して彼の哲学的思索の対象にした問題」であり、「フォイエルバッハはキリスト教神学者によって死を知らないともいわれるのであるが、これは誤りであって、彼ほど死を突っ込んで考えたものはないといっても過言ではなかろう」[37] と思われる。最後にバルトは、フォイエルバッハの宗教解釈

が「悪しき死すべき人間の経験としての宗教」であり、このような人間の「〈高級な〉、〈重みのある〉、〈キリスト教の〉宗教」に対する限り、「全く正しい」ということを承認できるような態度こそが必要であると説く。しかしながら、そのような「宗教」とは別の「新らしい宗教」、「真の宗教」などはどこにも全く存在しないのである。もっともこのような「批判」こそが代表的な「護教」にほかならないことは田川建三があちらこちらで力説している通りである。[38]

バルトは、このようなフォイエルバッハへの「批判」を強化するつもりでか、長目の「論争的あとがき」において、特にブルーンの著書 (W. Bruhn, *Vom Gott im Menschen*, 1926) への批判をなしている。[39] しかしながら、もちろんフォイエルバッハがそのような「人間の内なる神」をつくり、信じているのではない。もちろんフォイエルバッハ哲学からそのような「神」を何とか鋳造しようと思えば不可能ではないのだが。この辺で本稿を短くまとめよう。

五

田川建三の言葉を借りるならば、バルトはそのフォイエルバッハ論においても、「近代キリスト教史上最大の（そして史上最後の？）キリスト教護教家」[40]である。バルトは、フォイエルバッハに対して巧妙な「宗教的かかえこみ」[41]をなしている。「肉体の中の一本の刺」としてかかえこもうとするのである。その後も、「世界的規模で一種のキリスト教復興をひきおこす力となっていった」[40]このバルトの後継者たちによっても、フォイエルバッハに対して基本的には同様の「かかえこみ」がなされてきたのであるが、その護教意識はより一層強化されていると私は判断せざるをえない。[42] そして思想史的にも、本稿の冒頭に述べたような「かかえこみ」が進行しつつあると思われる。巨視的に神学史をながめるならば、確かにシュライエルマッハー以来のプロテスタント神学は、ある一つのまとまりを持った「一つの時代」(eine Periode) を形成しており、[43] 基本的には、今日のわれわれもなお依然としてその「時代」の中を生き

ているのである。われわれの世紀のあの大いなる神学者たちの、半世紀にもおよんだあのさまざまな神学的試みも、その「時代」の大きな流れの中につつまれ流されていたものと言えよう。しかしながら、その「プロテスタント時代」は急速に「終焉」しつつある、と私にも思われる。[44] そうだとするならば、その「時代」の神学の奥義をあばきだした「探偵」たるフォイエルバッハをこそ足がかりにして、キリスト教批判・宗教批判を学として更に徹底させる道が探し求められるべきではあるまいか。今こそまさしく、「フォイエルバハの唯物論に内在するぶきみな力」をもう一度嗅ぎつけるべき時なのである。[45]

註

(1) 大井正『マルクスとヘーゲル学派』福村出版、一九七五年、五〇頁。特にその第二章「唯物史観の形成過程におけるフォイエルバッハの役割」(四八〜九八頁)を参照。

(2) 梅本克己『増補・人間論』三一書房、一九六四年、二〇頁。

(3) 同書、二九頁。

(4) 船山信一訳『フォイエルバッハ全集』第九巻、福村出版、一九七五年、「解題」、三二八頁。

(5) 同『全集』第一四巻、一九七六年、「解題」、三〇四頁。

(6) K. Barth, "Ludwig Feuerbach", in: *Zwischen den Zeiten*, 1927, S. 11–40. なお、同論文はバルトの論文集 *Die Theologie und die Kirche*, 1928, S. 212–239. にも再録されている。なお、世界思想教養全集二一『現代キリスト教の思想』河出書房新社、一九六三年に、井上良雄による良訳(九五〜一二〇頁)と「解題」(三六三〜三六四頁)がある。

(7) ders., *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert* (1947), Siebenstern 1975, Band 2, S. 457–462.

(8) トーランス『バルト初期神学の展開』吉田信夫訳、新教出版社、一九七七年、第四章(六二〜二〇八頁)を参照。

(9) 同書、二〇九頁。

(10) Barth, in: *Zwischen den Zeiten*, 1927, S. 11., 井上訳、九五頁。

(11) トーランス、前掲書、八二頁。

(12) 特に『キリスト教の本質』(一八四一年)に対する批判への、フォイエルバッハ自身による反論は、『『キリスト教の本質』にかん

する或る神学的評論の解明」（一八四二年）、「著書『キリスト教の本質』の評価のために」（一八四二年）、そして「『キリスト教の本質』第二版への序言」（一八四三年）などの中に見られる。

(13) Barth, op. cit., S. 12., 井上訳、九六頁。

(14) ibid., S. 12-21., 井上訳、九六～一〇七頁。

(15) ibid., S. 16., 井上訳、一〇〇～一〇一頁。

(16) ibid., S. 13., 井上訳、九七頁。

(17) ibid., S. 16., 井上訳一〇一頁。

(18) フォイエルバッハ『宗教の本質にかんする講演』、船山訳『全集』第一一巻、一九七三年、二一八頁。W. Schuffenhauer (hrsg.), *Ludwig Feuerbach gesammelte Werke* 6, 1967, S. 31.

(19) 同書、二一五頁。*ibid.*, S. 28-29.

(20) 同書、二一八頁。*ibid.*, S 31.

(21) Barth, op. cit., S. 22., 井上訳、一〇七頁。

(22) ibid., S. 22., 井上訳、一〇七頁。

(23) ibid., S. 23., 井上訳、一〇八～一〇九頁。

(24) ibid., S. 23-24., 井上訳、一〇九～一一〇頁。

(25) ibid., S. 24., 井上訳、一一〇頁。なお、本稿の註(12)を参照。

(26) ibid., S. 24-26., 井上訳、一一〇～一一二頁。

(27) ibid., S. 26-28., 井上訳、一一二～一一四頁。

(28) ibid., S. 28-30., 井上訳、一一四～一一七頁。

(29) 井上良雄、前掲書、「解題」、三六三頁。

(30) Barth, op. cit., S. 26., 井上訳、一一二頁。

(31) コリント後書一二、七。

(32) 例えば、本稿七九頁。

(33) Barth, op. cit., S. 30-33., 井上訳、一一七～一二〇頁。

(34) ibid., S. 30., 井上訳、一一七頁。

(35) ibid., S. 31., 井上訳、一一八頁。

(36) ibid., S. 31-32., 井上訳、一一八～一一九頁。

(37) 船山訳『全集』第一六巻、一九七四年、「解題」、四二八頁。船山によると、観念論者は死を観念的に問題にし、唯物論者は一般に死を忘れている現代において、フォイエルバッハの死および不死の思想は大きな意義を持っているのである（四二九頁）。

(38) 例えば、田川建三『立ちつくす思想』潮草書房、一九七二年、「宗教的かかえこみ」（二四六～二七八頁）を参照。

(39) Barth, op. cit., S. 33-40.

(40) 田川建三『批判的主体の形成』三一書房、一九七一年、一六五頁。

(41) 本稿註(38)を見よ。

(42) 代表的なものとして、J. M. Lochman, "Von der Religion zum Menschen", in: *Antwort, Festschrift zu Karl Barths 70 Geburstag*, 1956, S. 596-609., ders., "Der Atheismus", in: *Evangelische Theologie* Heft 3, 1958, S. 112-122., H. Gollwitzer, "Die marxistische Religionskritik und der christliche Glaube", in: *Marxismusstudien* 4, 1962, S. 1-143, S. 37-55., ゴルヴィッツァー『マルクス主義の宗教批判』松尾喜代司訳、新教出版社、一九六七年、五七～八四頁、又、ガイヤー『現代神学の状況』寺園喜基・森泰男訳、日本基督教団出版局、一九七八年、「無神論とキリスト教」（三五～七七頁）、などがある。

(43) Barth, *Die protestantische Theologie im 19. Jahrhundert*, Band 1, S. 19., バルト『一九世紀のプロテスタン神学（上）』佐藤敏夫訳、新教出版社、一九七一年、十六頁。

(44) さしあたっての説明として、ツァールント『二〇世紀のプロテスタント神学（下）』新教セミナー訳、新教出版社、一九七八年、最終章「プロテスタント時代の終焉か？」（二四一～二七九頁）を参照。

(45) メーリング『ドイツ社会民主主義史（上）』足利末男・平井俊彦・林功三・野村修訳、ミネルヴァ書房、一九六八年、九七頁。

〔本稿は一九七七年度文部省科学研究費・奨励研究（A）による研究成果の一部中間報告である。〕